

答えはすべて解答らんに入れない。

一次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

五日後、ふたたび奈良へ。花冷えの日は続いていたので、依然として満開であった。春日の一の鳥居の横から低い丘をよぎり、向うがわの斜面に出ると、ゆるやかな石畳の坂道の左右に、崩れた土塀が断続していた。点在というに近い有様だが、過ぎし世の土塀のおもかげをどうにか留めている。あたり一帯はかつて雑木林だったのを切り拓いて整備し公園化したのだろう。あけつひろげに、あかるくなつた一帯が、いまは九重桜の①花ザカリ。雑木林のなごりらしい樺の大木が二株、花の雲よりも手前に突っ立って、A崩れ残った土塀とひそかに交信している。深淺さまさまの②キズを負い、大小の穴をうがたれ、風雨に削られた土塀の表面には、ながめているうちに古生代の化石のような物のまぼろしが浮かんで消え、あとには猿や熊や鹿の顔、だれやら見おぼえのある人の顔が、あらわれては消える。

ようやく絵どころが動いた。ゆつくり写生し、彩色をほどこしおえたとき、よく晴れていた生駒の空に灰色の雲が集り、空気がひんやりしてきた。料亭江戸三の離れ家が見え隠れする木立から鹿の親子がつれ立って近づいてきた。親鹿のあたまを撫でながら目を見ると白く濁っている。この動物にも白内障があるのかもしれない。脚の運びがおぼつかないのはそのためかもしれない。二十年ほど前、その頃はまだ学生だった末娘と春日の森を歩いたとき、頻りに雌鹿の背を撫でていた娘が「鹿って、いい匂いがする」と言った。指をかぐと、たしかにプディングのような匂いが移っている。子供の頃、母が作ってくれたプディング……。不意にさびしくなり、猿沢池のほうへ帰りをいそいだ。

水彩をこころみるようになったのは、四十歳前後からで、きっかけは浅井忠の水彩画にあった。油彩画と等価なところまで、日本の水彩画を一気に高めたのは浅井忠である。一九〇〇年(明治三十三)より渡欧二年のあいだにこの人が描いたグレ村(パリ南方、フォンテーヌブローから遠くない村落)の石橋、廃墟の塔、洗濯場、教会堂、牧場などを取り込んだ水彩画は、浅井忠の代表作だが、帰国後すぐに東京から京都に移り住み、一九〇七年、五十五歳で没するまでをここに暮らした人だから、加茂川、糺の森、八瀬、そして比叡山を描いた水彩画も数多く、なかには八瀬のくぬぎ林を描いて「秋林」と題したすばらしい作品もある。

そういう浅井水彩画をただ見ているだけでは我慢できなくなって、なるだけ浅井風に、つまり浅井忠の目を借りて、浅井忠の色調、タッチをまねるべく心がけて描くというこころみに手をつけた。古風な言い方をすれば「事、志とは大いに異り」、わたしの絵が「へたの横好き」の③イキを出ないのと言わずと知れたことである。

しかし「一寸の虫にも五分の魂」とことわざにいうように、Bわたしの腹の虫にも少しの魂があり、その虫がときどきじつとしていらなくなり、もぞもぞとうごめく。水彩を描いてこの腹の虫の餌にしてやると、ふしぎと虫はおとなしくなる。このことから④拙して、わたしの腹の虫というやつは、これを□□と呼べばいいのかもしれない。

浅井忠の門下に加藤源之助という人がある。生家は今も京都市中につづく法衣商だが、この人が油彩画を全く手がけず、もっぱら水彩に終始したのは、稼業で扱う品々に油絵具の匂いが移るのを避けたためであった。そういう心がけのもとに描かれたこの人の水彩画には、一見おだやかなうちに、はずむ息遣いが聞こえる。

油彩画は、画材、道具がいろいろ必要な上に、作品が場を占める。手狭では、不都合になる。その点、水彩画は、画用紙、絵具箱と兼用の小さなパレット、筆、水があれば事足りる。描いた絵も机の引出しに⑤オサまる。わたしはウィンザー・ニュートンのそういうパレット、てのひらにオサまる小さなのを愛用している。筆は鼯毛の面相筆一本あれば、小品を描くには十分である。水はカメラフィルムの空筒一、二本に密封する。小さな提げ袋に道具がすべてオサまる。散歩のついでにスケッチする。旅行には忘れず持つてゆく。なにしろ軽便だから荷の重くかさばる心配がない。

百枚の写真よりも一枚のスケッチ、ということをしてここで主張してもいいだろう。旅の印象は時とともにうすれるし、記憶は頼りにならない。記録写真が印象をよみがえらせることを少しも否定するわけではないが、水彩スケッチ一枚に十分、二十分を惜しまなければ、記憶はこの手仕事によって記憶本来の頼りなさを免れる。ドラクロワのモロッコ紀行のスケッチ帳には、絵の余白に、着色できなかった部分の色を文字で記入したものが少なくない。かれは、のちになってこのスケッチ帳を活用して油彩画の大作を描く。

欲を出せば、切りがない。余技なら余技の範囲にとどめる用意も大切なことである。それでもデッサン、スケッチには、次のような余得がある。ものを写生しようと鉛筆を持ち、紙を広げて、ものを見る。すると、たちまちのうちに、ものがそれまでとはすっかりちがったものに見えるはじめる。見なれていたものが、見なれぬものに一変する。それまでは、ものを見ているつもりで見えていなかったのがわかる。写生はものに迫る何よりの方法である。

杉本秀太郎『ひつつき虫』

問一 — Aはどういうことですか、分かりやすく説明しなさい。

問二 — Bの表現には筆者のどういう気持ちを表されていますか。

問三 空らんにあてはまる語をⅠの文章から探して入れなさい。

問四 部分について、

(1) 筆者がこのように言ったのはなぜですか、Ⅱの文章から説明しなさい。

(2) (1)で答えたことと同じ内容をⅠの文中から探してまとめなさい。

問五 文中の ①～④のカタカナは漢字になおし、漢字は読みを答えなさい。また、⑤に当てはまる二つの漢字をつかった二字熟語を答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「みんな、そろそろ全員の顔をだいたい覚えていた頃だと思っんで、級長と係を決めて、班を作ろうと思います。」

わたしの最もうんざりする作業の時間がやって来た。とたんに頭をくつつけあった何人かの女の子たちの視線から、これから起こることは容易に想像がつく。男子の級長が決まった。

「じゃもうひとりの級長はだれがいいですか。女子がいいけど、男子でもいいですよ。」

『はにかんでいる』かのように、ひとりの女の子が手を挙げた。「はい。斉木さんがいいと思います。」

『斉木さん』という字が、黒板に大きく書かれた。それだけでもうさら

されたような気分だ。同時に、あれ(注「斉木さん」がわたしの家族に共通の言葉であることが、なんだか遠い悪夢のように感じられる。

「久保さんは、どうして斉木さんがいいと思いますか。」

顔には見覚えがある。確か三年か、四年の時一緒だった。わりとかわいらしい顔立ちで、ミーハーで、リーダー的な子だったように思う。それにしても先生、理由なんかこの子に言わせてなんになるんでしょう?

「斉木さんは、とっても頭がいいし、それに、責任感があるからです。」

わたしが今、先生なら、『頭がいい』『責任感がある』という言葉について、彼女たちがいったいどれだけのイメージをもっているのか、即刻、討論会に切り替えたいところだ。ああ、わたしはいったいなをやっているんだろう。ひとつひとつの事柄があるたびに、こころの中で毒づき、

自分を汚している。家に帰りたい。

「ほかに推薦はないですか。じゃ、斉木さんでいいと思う人は手を挙げてください。」

ほぼ全員の手が上がった。また級長をやらされる。ほとんど恥さらしの雑用係だ。

「じゃ、女子は斉木さんに決まりました。斉木さん、立ってあいさつしてください。」

わたしはがたつと椅子をひいて立ち、わたしをハメた連中の方にちょっと意味ありの顔をして見せ、

「毎度どうも。」

とだけ言つてすぐに腰掛けた。わたしを持つのがはじめての若い女の先生は、ちよつと困つたようだった。男どもはさっそくあちこちで「毎度どうも」「毎度どうも」と言い交わしている。女の子たちは、去年よりもわたしがしぶとくなつているので、思惑がはずれたといったところか。そういつまでも、まじめに悩むと思うなよ。

(中略)

「おつっつつかえりー。」

「たつっつっだいまー。あーつかれた。なんかいい本ない？」

「スズキ(注 杉子の弟)がまたどっさりマンガ買い込んで来たよ。今まで読んでただけど、わりとおもしろい。」

「なんかそういうんじゃない奴がいいな。むずかしいのがいい。体だけ同じ年のばかどもには、高尚すぎて足元にも寄れないような奴、ない？」

「なんかあった？」

ママはカンがいい。けれどわたしは「まあね、たいしたことじゃない。」としか言わない。こう言えば、この家ではそれ以上突っ込まれることはない。

「そう？ ガマンし過ぎないようにね。」とママは言つて、本棚から何冊か取り出してくれた。

「では、ほれ、岩波文庫の青いところからざーつと、『天才の心理学』でも読んでみたい。」

「ん。」と言つたものの、本に手がのびなかった。「そういうのでもないんだな。なんだろう。なにが読みたいのか、自分でもよくわかんないや。」

「ふむ。」とママは鼻で言つて、本を戻した。

わたしの読書量はかなりのものだ。それも年々増えていつている。休み時間、お昼の時間、掃除の時間、学校ではほとんど本を手放さない。体育もサボりがちだし、最近では授業中にも読んでいる。朝、図書室から一冊持ち出し、帰ってくるまでには読み終わっていることが多くなった。このぶんでは一日に二冊持つていかなければならなくなるだろう。

わたしはわたしの言葉を、文学とパパとママの言葉で培ってきた。考へことも想像も、すべてはその言葉たちで組み立てられる。それが学校ではまったく通用しないということに気づいたのは三年生の時だった。

それまではわりと人気者の部類で、わたしはいい気だしやべりまくっていた。何人かで集まれば、会話をリードしていくのはたいていわたしだったし、パパに教えてもらったギャグは絶対にウケた。今考えると、あんなハイブローな冗談が普通の小学生にわかるわけがなく、みんなはわたしの話の十パーセントも理解せずに、ただ勢いにつられて笑つていただけだったんだろう。

その勢いが崩れた。きつかけは何だったのか、推測のイキを出ないがおそらくどれかひとりが、斉木さんの言っていることがわからないと言ひ出し、それにつられて他のみんなも、実はわたしもよくわからない、実を言うとなたしも、わたしも、ということになっていったのだろう。

で、ある朝わたしが「おつはよくん。」と言つと、しらっとした空気が返ってきた。以来わたしは、自分が天才であると自認している。

(中略)

アキコさんの焼きたまごやきの匂いが、うちの台所に漂っていた。ママはたまごやきに砂糖を入れないけど、アキコさんはちよつとだけ入れる。その匂いをかいでいるうちに、どうしてか、ママに言えなかったことが、ふいに口をついて出た。

「ねえ、アキコさん。」

「なに。」

「あたし、変わつてゐるのかな。」

アキコさんがすぐに答えてくれなかったので、やつぱり唐突すぎたかと思つて、一瞬、ひやつとした。けれど、ふりむいたアキコさんの顔が、とても『まじめ』になつていた。

「どうしてそう思うの。」

「ん、なんだか、することなすことみんなと違うしき、みんながこれがいいて言うもの、あたしはちつともそう思わないの。」

「例えば？」

「ん、たとえばさ、うちってテレビがないじゃない、前にそれを言ったら、みんなすごいびっくりして、『じゃ夜はなにしてるの？』って聞くだよね。それで、『本を読んだり、ひとり考えてえ』としたり、『あとに言つたっけな、あと、そう『庭に出てぼーつとしたり』って言つたら、『暗いね』って言われたんだ。だけど、そういうのを普通、『暗い』とは言わないでしょ？ それで、『あなたたちの言う《暗い》って言葉は、どういうことを表してるの？』って聞いたの。そしたら、変わったひとだつて言われた。」

アキコさんは黙つていた。『答えに窮するアキコさん』を、わたしは初めて見たように思つた。わたしは続けた。

「言葉自体がさ、なんかみんなと違うみたいなんだよね。みんなもう色気づいてさ、かれが欲しい、とか、よく話してるの。一度そういう話に、何かのはずみでまじつちやつたとき、『斉木さんはどういう人がいい？』って言われて、『そんなつまんないもの欲しくない。』って言つたの。だって、『かれ』とかいう言葉はさ、もし結婚していい状態であつても、ママにとつてのパパを表しはしないと思うんだ。その言葉が表しているのは、くついたり離れたりが激しくて、はやりものの、なんて言うのかな、なんにしろ、つまんないものでしかないと思うんだ。そんなのあるだけムダでしょ？ でも、そんなのはおかしいらしいんだ。《かれ》とかいうものが欲しくない人は、どこか異常があるんだつてさ。」

「あはは。」

「笑わないでよ、けつこつまじめなんだから。」

「杉ちゃん、あんた、お母さんとおんなじこと、おんなじ口調で言ってるんだもの。」

「え？」

「あんたのママはね、昔から『彼はいるの？』とか、『恋人いるの？』とか聞かれても、絶対にうんって言わなかった。軽蔑したような目で相手を見て、ふんつと鼻を鳴らして、『なにそれ？』って言うのね。『あなたの言うその《彼》』という言葉は、いったいどういう存在を表してるわけ？』なんて言つちやうの。あたしはそういうあんたのママがわりとわかつてたけど、あたしの他には、女の友達いなかったんじゃないのかな。話しかけてくる人ごとに、そういう調子で受け答えしてたら、当たり前だよ。でも、言葉というものにたいして、どうしてもいいかげんになれない人間だったのよ。

ある日突然狂つたようになって、『アキ、あたしの言うこと解る？ あたし、日本の言葉を話してるんじゃないの？ どうしてだれかの話した言葉のいちいちを、これはあたしの言葉に直すとかいう意味だな、ああこれはこういうことかなって、頭の中で直さなきゃいけないの？』つて泣き出したことがあつてね。めっちゃくちやだった。それが、あたしがちよつと旅行に出て、帰つて来たら、もうものすごく感動的に落ち着いちやつたの。なにがあつたかは知らないけど。」

「それ、いつくらのとき？」

「大学卒業したあたりかな。周防(注 杉子の兄)の生まれる、ちよつと前くらい。ありや、そういうや周防、ゆうべ帰つてこなかったんじゃない！？」

「おはよう、ねえ音楽室までいっしょに行こう。」

昨日の彼女が擦り寄つてきた。いっそはつきり迷惑だと言つてしまおうと思つたが、めんどくさくてやめた。なにも答えないでいると、「ねえ、いっしょに行つてもいい？」と食ひ下がってきた。声が震えている。わたしのほうがよっぽど情けないキモチだ。

さらに二度ほどたたみかけられて、やつと「かつてにすれば？」と答えた。つつこんだ会話はしたくないので、自分でもわからないようなこむずかしい本を持つて来ていた。

ここまでされて一緒にいても楽しくないだろう、彼女だつてじゅうぶんそれを感じているに違いない。だけど、このちいさな社会では、一緒にいて楽しいかどうかという問題は問題ではないらしい。弱い彼女には、ただ、だれかといなければという強迫観念があるだけだ。そして彼女はにこにこしている。目は笑わないでにこにこして、だれかがわたしたちのほうを見たときに、ここはもう《集団》になつていますよ、ということのアピールできるように、必死になつてしゃべりかけてくる。

わたしは意地悪になった。早足にすたすたと歩いて、五年生の教室に入つていった。ビクビクしながら彼女もついてくる。

☆

この「彼女」(まりかちゃん)から杉子は、「ともだちになつて」と頼まれる。そつけない態度を取る杉子に、まりかちゃんは必死でついてきて、登

校するときも家までむかえに来るようになる。そんなおり、杉子は音楽の先生である「多恵子さん」が、今まで出会ってきた音楽の先生とはちがうタイプであるを知る。

☆

そして今日、先生が教室に入って来たときから、ある予感がしていた。これからかかる音楽を、わたしは知っていた。もうすぐ鳴り始める。視界が白くなった。ざわめきが遠のいた。いつもの椅子に腰かけた先生の額に、なにかのしるしが見える。

スピーカーが、体中の緊張を吸いとってゆきそうな、女声のハーモニーを流し始めた。この曲ならわたしは、生まれる前から何度も聞いたことがある。

ブルガリアン・ヴォイス（注　ブルガリア民族独特の発声法）だ。

じつと聞いているとき、となりに座っていた『まりかちゃん』がわたしをつつき、なにか書いた紙を見せた。『この先生っておたくだよネ　帰りに斉木さんちに遊びに行ってもいい？』

なんのことだか、意味がよくわからなかった。なにか、かわいそうな生き物がそばにいた。わたしがじつと見つめると、少し笑おうとして、それから急に引きつったような顔をして、黙ってそそくさとうつむいてしまった。

（中略）

それからの学校生活は、私にとってなかなか楽しいものになっていた。

多恵子さんはたいてい音楽準備室にいた。職員室は煙草臭くて、息が詰まるんだそう。わたしも「教室はチョークの粉で息が詰まる」という理由で、ご一緒させていただくようになった。

さいわい音楽準備室は、わたしの教室を出て階段を登ればすぐだった。休み時間、お弁当の時間、放課後、私は足繁くそこへ通った。多恵子さんは内緒でお茶やお菓子をくれたし、いないときには、勝手にCDをかけてもよかった。

なにより二人は話が合った。家族以外の人間と、こんなに腹を割って話せたことは今まで一度もなかった。多恵子さんはママの本も持っていたし、ほかにもたくさん本を読んでいた。わたしの読んだ本とずいぶん重なってもあった。CDだって、二人共通のものがずいぶんあった。

初めのころは、『まりかちゃん』も一緒だった。わたしがひとりで教室を出ようとすると「どこ行くの、あたしも行きたい。」と言って、返事も聞かずにくっついてくるのだ。一人で取り残されてはたまらないんだろ。うが、邪魔つけなことこの上なかった。わたしと多恵子さんの会話のレベルに、彼女は到底追いつけなかった。黙っていればいいものを、必死になって入り込もうとするものだから、白熱した議論がぶつくと途切れってしまったりする。二人がある作曲家について話していると、「クラシックっていいですね。」と、それだけポツンと言ってよこす。こっちは「そうね。」以上の何を言えればいいのだ。

そしてとうとう多恵子さんのいないときに、「あたしが邪魔だから、わざとあたしのわかんない話ばかりするのよね！」と言ってすねて泣いてしまった。また爪を立てられるかと思つて、正直非常に怖かった。実際いまにもつかみかからんばかりだったが、多恵子さんが戻ってくると出て行ってしまった。以来ずっと口を利いていない。家まで迎えにも来なくなつた。

「なんか嫌なものねえ。」と多恵子さんが言った。「胃がいたくなつてしまう。」

「やっぱり？」とわたし。「後味悪いよね、まるであたしがいじめたみたい。」

「私はできるだけ、あの子にも気を配つたつもりだったんだけど。」

「あたしだって、ずいぶん我慢したわよ。」

「お互い不幸になつてしまう。」

「もつと酷い不幸から逃れるために、あたしを引っ張つたのよ。ふたりで一緒に耐えましょう、つてなもんでさ。」

「でも、つっぱねなかったんでしょ。」

「めんどくさくてね。」

「わかる。どっちにしても、自分じゃないような。」

「そうそう。」

「かわること自体、間違いであるような。」

「そうそう。」

「どうしてあげればいいのか、わからないわ。」

「わからない。でも、あたしが彼女の望む通りになつて一緒になつてかばいあったとしても、彼女は本当にはしあわせにはなれないと思う。それはわかる。」

A「今はだれも、そこまでのしあわせを望んではないのかも。」

「わからないね、どっちがしあわせだか。」

「そう、正しいのは、実はあの子かも知れない。」

「そう、ほんとうにそう思う。みんなたあいがない話してるじゃない、平和でいいな、と思うことある。」

普段、自分自身のころろの中で言葉にするときには、意地でもこんな表現はしたことがなかった。程度が低いね、みんなバカだねと言っていた。けれど、こうしておなじ言葉で話せる相手がひとりいると、かえって不思議に孤独感が募ってきた。わたしは続けた。

B「みんな決して悪い子たちじゃない。楽しそうにしてるよ。男の子たちは精一杯イタズラしてる。女の子たちは思春期に入つて、これからいろんなこといっぱい悩むんだろうね。そういうの、すごいいい、と思うんだよ。もしかしてそれがしあわせつて奴かも知れないつて。だけど、」詰まつてしまった。多恵子さんも沈んでいた。そのあとの気持ちは、いまの万倍の勇気を出してさらけ出さないと、言葉にできそうもなかった。今の自分はまだそこまでの成長を、幸か不幸か、していないのだということを思い知った。

チャイムが鳴った。わたしは戻らなくてはならない。「じゃ。」といってドアを開けたとき、多恵子さんが、

「まっ、お互い、がんばりませう。」

ママが、ずっと不調だった。物思いに沈んで、昨夜は泣いていた。なんとなく、わたしのことで悲しんでいるような気がした。

多恵子さんのことはとつても喜んでくれたけど、『まりかちゃん』が迎えに来なくなつたいきさつを話すと、急に『はっ』というような反応を示して、そのままなにかを考え込んでしまった。

パパが悪いのだ。こんなときに家出なんかするからだ。今頃ニョロニョロの船に乗ってどこかの海を彷徨っているのだろう。今度ばかりは、そんなパパが許せないような気がした。ママを元気づける手立てがなくなつたのだ。

わたしは不安になった。この家にだけ、わたしの当然の価値があつたのに、それを保証してくれていたものは、いま揺らいでいる。

多恵子さんの音楽準備室は、今や荒れ狂う海のなかの孤島のようにだった。わたしは木っ端のように漂っている。

恐ろしい予感があつた。わたしがぐずぐずして全てを言葉にするのを拒み続けるならば、運命はもつと悲惨な状況を用意すること、むりやり壁を越えさせようとするだろう。でもビクビクしながら、わたしはそれを待っていた。Cそれがある意味でいちばん正しいやり方だと知っていた。けれどその考えを理解できるのは、わたしの中のいつとう深いところのわたしであつて、普段つかっている部分のわたしではない。要するにストレスは一向に減らなかつた。気が弱くなつて、以前のように自分を天才だなどと思えなくなつていた。単なる変わり者、言葉の通じない異端者だった。ひよっとしたら気が違っているのかもしれないと、半分本気で考えた。

わたしの言葉の中に、『のようなもの』だの、『とかいうもの』だのという単語が頻繁に出てくるようになった。文末は『かも知れない』で締めくくられた。紙に書くと、あらゆる単語をカギカッコでくくつてしまふか、あらゆる単語の前に『わたしの言う』をつけなければ不安になる。わたしの言葉で言えばわたしはわたしの言う『天才』かもしれなかつた。世間一般からみればママにとってパパは『かれ』だったかも知れなかつた。わたしと『まりかちゃん』は『ともだち』なのかも知れなかつた。日本は『しあわせ』なのかも知れなかつた。

わからない。

もうなにもわからないかも知れない。

ほんとのものはなにもない。『ほんとのもの』があるだけだ。

本地雅映子『氷の海のガレオン』

問一―― Aとありますが、「そこまでのしあわせ」とは、どのような状態のことでしょうか、説明しなさい。

問二―― B「だけど、」につづくことばは、どのようなものだと考えられるでしょうか、ことばのつづきを考えなさい。

問三―― Cとありますが、ここで「杉子」はどういうことに気づきはじめてのでしょうか、二百字以内でくわしく説明しなさい。（句読点は字数にふくむ）